

ソビエトのピオネール組織に関する研究
- ピオネールの活動と組織、運営について -

○里見悦郎 高橋和敏 (東海大学)

ソビエトのレクリエーション・社会教育

まえがき

ソビエトのレーニン記念ソ連邦ピオネール組織(以下、ピオネール)は10歳から15歳までの少年少女の課外活動組織である。その独特な組織と活動、運営制度によって諸外国の青少年組織の中でも、特出したものとなっている。特に、東欧・アジアの社会主義諸国でソビエトのピオネールを原形にした少年少女の課外活動組織が創設されている点を見ても、ソビエトのピオネールが社会主義諸国の課外教育制度の原形として重要な位置にある。

本研究の目的はソビエトのピオネールの施設で実施されている様々な活動と組織の運営制度を明らかにすることによって、ソビエトの社会教育制度の一端を解明しようとするものである。

研究の方法

1) 文献資料の収集と分析

2) ソ連人留学生からのヒアリング調査

ヒアリング調査は、1981年10月から1982年7月にかけて東海大学に留学していたモスクワ大学学生に対して行った。ヒアリングは、ピオネールの活動と組織運営を中心に、文献上では明らかにされていない細部について具体的な説明を求めた。

これまでのピオネールに関する研究には、ピオネールの成立と発展の過程を中心にした歴史的研究と共産党の下部組織としての思想の研究に重点が置かれてきた。この研究では従来の研究では明らかにされていないピオネールの施設と活動、さらに、組織の運営制度について、文献資料を基に研究を進め、文献上では明らかにされていない細部についてソ連人留学生の具体的な説明を基に検証を行うという方針を取った。

考 察

1) ソビエトのピオネールの組織と運営

ソビエトの青少年組織は中等学校において行われる課外活動と密接な関係があり、ピオネール組織の活動は「青少年の一般教育とともに統一され、一体をなすものである」(1)と考えられている。

ソビエトの青少年組織には、7歳から10歳までの児童を対象としたアクチャプリヤータ、

11歳から15歳までの少年少女のピオネール、16歳から28歳までのコムソモールがあり、これらはいずれも共産党の指導の下に置かれている点から、政治、思想教育の一形態である。しかし、11歳から15歳までの少年少女を対象としたピオネールは従来の位置付けとしての政治、思想教育の場としての解釈の外に、義務教育と同等、あるいは、ある面では義務教育以上に高い位置付けに置かれた教育機関としての役割が与えられていると推測される。

ソビエト共産党の指導の下に置かれたピオネールの役割は将来のソビエトを担う健全なソビエト国民を育成することであり、しいてはソビエト共産党員の候補となるコムソモールの養成である。このため、ピオネールの組織と運営に関しては共産党の全面的な支援と指導の下にピオネールの上部組織コムソモールが当たる形式となっている。さらに、ピオネールの活動の場となる施設とそれを支える人員は職業別労働組合の全面的な援助と協力によって成り立っている。この様に、児童・青少年の課外教育に共産党が深く関与している点はソビエトの社会教育制度の特長と考える。

2) ピオネール組織への支援制度

コムソモールと職業別労働組合のピオネールへの支援体制は次の制度からなる。

コムソモールはその指導の下に置かれている中等学校のピオネールの部屋へコムソモールの員を派遣する。派遣されたコムソモールの員はピオネール隊長として放課後、課外活動のために集まって来るピオネールの員の指導をする。音楽大学、体育大学等の教員養成課程を有する大学は教育実習として夏季のピオネールキャンプへピオネール隊長として学生を派遣する。そこで学生は様々なサークル活動の指導を行う。

ソビエトの労働組合は職業別に組織される。そして、1都市に1業種の工場・企業が集中するケースが多い。この様なソビエトの都市では、中等学校、ピオネール組織の周辺に位置する企業、工場、大学等の諸機関が中等学校、ピオネールの後援団体となって活動資金、施設、人材等の援助を行う制度が完成している。これをシエフ(後援団体)と言い、ソビエトの課外活動、

社会教育施設運営の基本的体制となって確立している。

中等学校、ピオネールとシエフの関係を結んだ企業、工場等は、その労働組合と共にピオネールへの援助を行う。

ピオネールキャンプの開設の手順を検証するならば、夏季のキャンプ実施前にシエフの関係のある企業・工場に中等学校から連絡があり、その年、学校のピオネールキャンプの援助を求められる。この結果、企業・工場とその労働組合はピオネールキャンプへのコムソモール員（企業・工場の職員でコムソモール員となっている者）の派遣、並びに、医師、調理師の派遣等を要請される。さらに、中等学校が常設のピオネールキャンプを所有していない場合は、企業、工場、労働組合がその施設をピオネールキャンプとして提供することもある。企業・工場はその青年労働者（コムソモール員）を、ピオネール隊長養成の講習会に派遣し、キャンプでの様々な活動の指導法を学ばせた後、キャンプへと送り出す。

このシエフの制度はピオネールのすべての施設運営に適用されている。ピオネールの活動の拠点であるピオネール宮殿の場合、ピオネール員の様々な好奇心を満足させるため、多くの活動と事業が用意されているが、このピオネール宮殿等の文化施設へは、近隣の大学、あるいは研究所、博物館等の教員と研究者がシエフの制度によって派遣されているケースも多い。さらには有名なバレリーナ、作家、音楽家などの芸術家が指導者として参画している。これはピオネール創設当初、指導者が不足した時代に多くの第一線の芸術家が社会奉仕として少年少女の教育に協力したことが現在も受け継がれているためである。

ソビエトの社会教育施設運営の基本となるこのシエフの制度は、その成立過程、運営制度について今後、明らかにされていかななくてはならない研究課題であるが、このシエフ制度がソビエトの社会において、正に、実社会と教育機関との関係の円滑化に効果的な役割を果たしていると推測する。これはソビエトの都市開発と都市経営が社会教育施設網の充実と結び付いているためでもある。すなわち、ソビエトではモスクワ、レニングラード等の大都市を除き、新興都市の多くは、1都市、1企業という形態がとられ、その企業が都市の基幹産業となるケースが多い。都市住民が同一企業・工場の労働者であることから、地域の文化施設、教育施設の運営に企業・工場の労働組合が参画することが出来

る制度が生まれたと推測される。さらに、都市行財政の面から言えば、都市住民の文化施設、教育施設網の整備費の支出削減のため、労働組合、企業にその費用の支出を請負わせる制度でもある。しかし、地域住民である労働者の視点から見ればピオネール等の子供達の教育施設の計費を自分達が担っているとの自覚が生まれてくると共に、住民が労働組合を通して支出された組合費が自分達のために還元されていることを意味するこの制度は、地域住民に社会教育施設完備のための理解を求める一助となっている。

3) ピオネールの活動と指導者

ピオネールはその活動のために、多くの種類の施設を所有している。その施設には次のものがある。

ピオネールキャンプ
ピオネールの家
ピオネール宮殿
少年技術者ステーション
少年自然研究者ステーション
旅行ツーリストステーション
子供鉄道
児童の海港と船舶会社
若い宇宙飛行士のサークルとクラブ
労働と休息のキャンプ
生徒生産隊
児童音楽芸術学校
青少年スポーツ専門学校
幼年スポーツ専門学校

これらのピオネールの施設の特徴は「子供達のそれぞれの年齢的特殊性を厳密に考慮して行われていることである。技術部門を例にとれば、小学校の生徒たちはサークルで様々な材料(布、針金、ボール紙、木)を用いて作業することを学び、様々な簡単な組立部品を使って作業しながら技術のモデルの作成及び組立ての初歩を習得する。少年少女達はすでに比較的複雑な習熟を身につけ、技能に親しみ、一定の方向をもった活動を選択する。そして、15～17歳の上級生になると生徒たちは(教師、科学者、高等教育施設の教師の指導のもとに)実験作業に参加し、自主的に研究を行い、模型ばかりでなく、実際に動く機械装置や設備を設計し、製作する。大多数のピオネールの家や宮殿、若い技術者ステーション、若い自然研究者ステーションには、彼らのために青年科学協会がつくられ、そこで彼らは考古学、微生物学、分子遺伝学、高等数学、計算技術、数理言語学等の分野の活動をしている。ここでは教科外活動のすべては科学と生産に密接に結びついている。上級生た

ちは、企業、経済組織、高等教育施設、研究施設の諸々の課題を遂行している」(2)このようにソビエトではピオネールの活動を通して、子供達に幼い時から自分の関心のある科目を自分自身で選択し、活動し、自己の才能や能力を自由にのびることが出来る制度を作り上げてきた。この結果、子供達は自分の才能や能力に合った活動を通して労働の意義と価値を自然に身につけることが出来る組織になっている。ピオネールの課外教育組織の活動を支える政府組織と団体には共産党、コムソモール、労働組合、文化省、交通省、海運省、ソ連邦構成共和国海運省、河川航行省、任意スポーツ団体、全ソ陸空海軍後援会組織、研究所、科学協会、創作連盟があり、さらに学者、科学者、作家、俳優、画家、舞踊家、スポーツマンらの協力と援助によってピオネールの活動は成り立っている。

「現在、労働組合の組織で少年少女のための活動を行っている企業のクラブの図書館は44000カ所、各工場、コルホーズ、ソフホーズ附設の技術クラブが約1500カ所ある。ソ連邦文化省の子供劇場、音楽学校、美術学校、図書館、プラネタリウム、サーカス、動物園、文化と休息の公園も児童を対象とした活動を実施しており、ソ連邦交通省は子供鉄道47カ所、若い技術者ステーション23カ所、鉄道員文化宮殿附属クラブ450カ所を運営し、ソ連邦河川及び海軍省は青少年艦隊160、若い水兵クラブ250、子供河川船舶会社2社を運営している」(3)。このようにピオネールの施設と活動は政府関係官庁と労働組合という官民合同の協力体制によって設立され、運営されている点がソビエトの社会教育施設の運営の特長である。企業・工場が官庁組織と合同で社会教育に参画し、物的、人的援助を行うというソビエトの制度は、これまで緊縮財政時にはその予算を削減される対象とされやすい日本の社会教育、社会福祉、文化施設にとって、今後、参考とするに値するものであると考える。

次に、ピオネールの代表的な施設について、その事業内容を考察する。

ピオネールの家

ピオネールの家は1922年にモスクワのハモプニキ区に初めて建てられた。このピオネールの家は重工業と軽工業の工場に附属の子供クラブが組織され、その子供クラブをコムソモール員が指導した結果、設立されることとなった。

ピオネールの家は子供達のために多くの活動サークルを組織し、学校教育だけでは十分に実施できない課外教育の援助を行っている。

ピオネールの家にはレーニンの部屋があり、ピオネール員はここでロシア革命当時、ボリシエビキ党で活躍した老人と会い、レーニンの話しを聞く、さらに、共産党の政策や国際情勢について説明を受ける。また、見学旅行を計画し、レーニンのゆかりの地や第2次大戦の跡を見学する。

カザフ共和国のオサカリエフカ村のピオネールの家はコルホーズ農場の協力で建設された。このピオネールの家には映画制作所、ラジオ放送局、飛行機・船舶模型作製室、技術製作室があり、約1500名のピオネール員が活動している。

ピオネール宮殿

1930年代初期、レニングラードの200以上の企業と組織が協力して帝政時代のアニチコフ宮殿をピオネール宮殿として、子供達に開放した。このレニングラードのピオネール宮殿に続いて、1936年にはモスクワ、さらに、キエフ、ミンスク、タシケント、イワノブオ、スベルドロフスク、ノボシビルスクにピオネール宮殿が開設された。

レニングラードのピオネール宮殿の各サークルには100名以上の専任職員がおり、職員は普通中等学校の教員資格を持っている。この職員の勤務時間は中等学校の授業時間にあわせ、子供達の活動が放課後となるので、中等学校の教師よりも遅い出勤となる。この専任教師の外に、中等学校の教師を退職した者や音楽、バレエ等の芸術家も非常勤として、子供達の指導にあっている。

レニングラードのピオネール宮殿には技術、科学、防衛、芸術、体育、図書、政治等の活動の部門があり、子供は自分の興味のあるサークルに入り、週2回、1~2時間単位で活動に参加し、専門的な指導を受けることができる。この宮殿のサークルと事業には次のものがある。

「技術部門

金属組立、機械仕掛のおもちゃ製作、船・飛行機の模型作り、電気工学、短波通信、リモートコントロールと自動機械装置、宇宙工学、ロケットの模型作り。

スポーツ部門

体操、陸上競技、アクロバット、水泳、水球、レスリングフリースタイル、ボクシング、フィギュアスケート、チエス、チエッカー、テニス、サッカー、飛込み、シンクロナイズドスイミング。

芸術部門

歌と舞踊のアンサンブル、合唱団、音楽アンサンブル、独唱サークル、舞踊サークル、民族楽器オーケストラ、バヤンオーケストラ、プラス

バンド、交響楽団、ピアノ、バイオリン、コントラバス、チェロ、クラリネット、木琴等の教室、絵画、テッサン、彫刻のアトリエ、ぬいぐるみ人形、人形劇、演劇、詩の朗読等のサークル。

自然研究部門

作物栽培、草花栽培、農業気象学、植物保護、みつばち飼育、果樹栽培等のサークル、狩猟、犬種改定、水中生物学と養魚のサークル」(4)

ソビエトの義務教育の目的はあくまで国定教科の知識を与える場所である。児童・生徒の身心両面の全面的な発達を目指しながらも、その目的は科学の基礎知識を与えることである。そのため、年少少女の才能の発掘とその育成は義務中等学校の教育目的から外されている。これを補うために課外教育施設が充実させられていると推察される。

実際、ピオネール組織の施設と活動も年少少女達の才能の発見という教育手段として大きな効果を上げている。レニングラードのピオネール宮殿にあるアカデミー会員プエオブルチエフ記念若い地質学者クラブは毎年、ウラル、クルミア、バイカル特別保護区での実習を行っている。毎年15名から20名のクラブ出身者は中等学校卒業後、大学の地質学部へ進学している。

イルクーツクのピオネール宮殿では数学、物理学、生物学、天文学等の各分野のサークルに300人以上の大学の教員と研究者、技術者がピオネール員の指導をしている。さらに、キシニョフのピオネール宮殿の生物学サークルは国立モルダビア大学の協力を得て、大学の研究者の指導の下で大学の研究施設を使用し、実験を行っている。

このようなピオネール宮殿での研究・学習サークルに年少少女を引き付ける手段の1つは、年少少女を対象とした研究コンクール「若い化学者」、「若い物理学者」、「若い数学者」のオリンピックがある。学校間のレベルから、地区、都市、州、共和国レベルでのコンクールが行われ、すぐれた成績を治めた者は専門科目別に設置された英才専門学校へ入学できる。このように、英才教育の選抜にも、ピオネールが関与している点も注目される。

ソビエトは約110の民族からなる多民族国家であるため、広くソビエト全土に創設されたピオネール宮殿は各地域の文化と民族風土に根づいた活動も行っている。たとえば、タシケントのピオネール宮殿では大理石の彫刻、木版画、民族楽器の製作などのサークル活動がある。バルト海沿岸地域ではコハク細工を、トルクメンではじゅうたん織などの民族の伝統工芸を学んでいる。一方、各地の民族スポーツも近代スポーツと同様に教え

られている。たとえば、トルクメンの乗馬、バルト海沿岸のヨット、ウラルやシベリアのスキーの外にアジア民族は格技、弓術など民族の伝統の普及にもピオネールの施設は大きな役割を果たしている。

この様に、1930年代に創設されたピオネール宮殿は、今日、ピオネールの活動の中心的な施設となっている。

少年技術者ステーション

少年技術者ステーションは年少少女がピオネール活動を通して科学の基礎知識を学び、彼らに知識欲、根気強さ、労働に対する創造的な態度といった将来のソビエトの工業と科学界を支えるソビエト国民に望まれる人格を形成し、理数系の才能を早期に発見することが設立の目的である。

少年技術者ステーションは地域の企業、工場の援助と協力によって開かれている。スベルドロフスク州の企業、工場、研究所、ソフホーズ、コルホーズは1000以上の若い技術者ステーションの活動を援助している。マグンドコルスクの冶金コンビナートが援助する若い技術者ステーションは7カ所にも上り、それらは43の実験室を持ち172のサークル活動を実施しており、1500名以上の子供達が参加している。

この少年技術者ステーションでは「科学と技術の夕べ」、「学者や発明者との会合」、「発明制作コンクール」が行われているが、さらに、ソビエト全土を対象としたコンクールも開催されている。1931年には第1回全ソ連邦子供技術者大会、1934年全ソ連邦模範技術コンクール、1935年第1回全ソ連邦子供技術創作展覧会が開かれ、今日でも継続されている。このように、社会教育施設で子供達の学習の動機付けとして全国規範のコンクールが開催されている点もソビエトの社会教育の特長と考える。しかも、少年技術者ステーションのサークル活動の指導のため、1926年11月12日には子供技術中央研究所がモスクワに設立され、指導者の研修会を開催すると共に、子供を対象とした技術教育の指導法が研究開発されている点からも、ソビエトにおいて社会教育がいかに重視されていたかが推察される。

まとめ

ソビエトのピオネール組織は年少少女の課外活動組織として創設されて以来、社会主義諸国の児童・年少少女の課外活動の原形となってきた。このピオネール組織は、政府関係官庁と労働組合の官民合同の協力体制によって運営されるソビエトの社会教育制度に基づいて運営されている点の特

長である。このおかげで、少年少女の教育に教育関係者ばかりでなく、社会を実際に支えている労働者、さらには、高等教育機関に働く研究者が社会教育に直接参加する道が開かれ、様々な活動を通して、子供と大人との心の通った交流が実現している。子供達はこの体験を通じ、実社会を理解し、さらに、自身の才能を自覚することによって生涯の職業を選択する。このように、少年期の課外活動が一過的なものではなく、生涯を通しての生き方にも深い影響を与えている点は社会教育のあり方について考えさせられる点である。特に、社会教育の運営に、企業と労働組合が深くたずさわっているソビエトの制度は、市民レベルでの意見を社会教育行政に反映させることを可能にし、行政主導型の日本の社会教育と比較し、民間にその門戸を開放している面で、市民にとって自由な裁量が残されている民主的な制度となっている。

今後、ソビエトの社会教育制度は日本の社会教育を考える上でも一考の価値があるものとする。

6. Система Физического Воспитания в СССР, Г.И.Кукушкин, Издательство Прогресс, 1984.
7. Энциклопедический Словарь Юного Спортсмена, Издательство Педагогика, 1979.
8. Народное Образование в СССР, В.А.Лешников, Издательство Педагогика, 1985.
9. Веление Времени, В.А.Ивонин, Издательство Физкультура и Спорт, 1969.
10. Очерки по Теории Физической Культуры, Л.П.Матвеев, Издательства Физкультура и Спорт, 1984.

引用文献

- 1) 「ソビエトの学校」、J. トミアック署、大柴衛、海老原逸訳、明治出版、1976、P 98。
- 2) Советская Школа Единая Система Образования и Воспитания в СССР, Издательство Прогресс, 1985.
P127
- 3) 同上文献 P 118
- 4) 同上文献 P 122

参考文献

1. 「ソビエトの学校」、J. トミアック署、大柴衛、海老原逸訳、明治出版、1976。
2. Советская Школа-Единая Система Образования и Воспитания в СССР, Издательство Прогресс, 1985.
3. История и Организация Физической Культуры и Спорта, В.В.Столбов, Издательство Просвещение, 1982.
4. История и Физической Культуры и Спорта, В.В.Столбов, Издательство Физкультура и Спорт, 1983.
5. История и Организация Физической Культуры, Н.Ф.Кулилко, Издательство Просвещение, 1982.